

# 日本ブロンテ協会関西支部 2022年大会プログラム

場所：大阪電気通信大学 寝屋川キャンパス 小ホール  
(〒535-8530 大阪府寝屋川市初町18-8 京阪本線寝屋川市駅下車 徒歩7分)

日時： 2022年3月26日 (土) 13:00~15:45

司会： 宮川和子 (神戸大学非常勤講師)

開会挨拶： (13:00~13:05)

開会の辞： 奥村 真紀 (日本ブロンテ協会関西支部支部長・京都教育大学准教授)

会長挨拶： 橋本 清一 (日本ブロンテ協会会長・青山学院大学名誉教授)

研究発表： (13:05~14:05)

1. 「ロックウッドは何をしに来たのか？」

音部 みはる (大阪市立咲くやこの花高等学校主務教諭)

2. 『夜ごとのサーカス』と『ジェイン・エア』

小田 夕香理 (富山大学准教授)

講演： (14:30~15:30)

「ハワースの内と外——ブロンテ作品に見るイングランド、ヨーロッパ、世界」

原田 範行 (慶應義塾大学教授)

総会： (15:30~15:40)

閉会の辞： 内田 能嗣 (日本ブロンテ協会顧問・帝塚山学院大学名誉教授)

日本ブロンテ協会関西支部事務局

〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1 大阪工業大学 工学部総合人間学系教室 瀧川宏樹研究室内  
TEL:06-6167-5191 E-mail:bronte.kansai@gmail.com

1. 「ロックウッドは何をしに来たのか？」

音部 みはる(大阪市立咲くやこの花高等学校主務教諭)

『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)には主に2人の語り手が登場する。物語の大半がネリー・ディーンによって語られるのに対し、ロックウッドは聞き手の役割を果たす。物語中の出来事と共に人生を過ごしたネリーが結末を(含めた一部始終)知っているのに対し、都会からやってきたロックウッドにとっては初めての内容となる。つまり、ネリーはその結末に向かって語りはじめ、私たち読者は何も知らないロックウッドと共に『嵐が丘』を読み進めることになる。そうすると作者であるエミリー・ブロンテ(*Emily Jane Brontë*, 1818-1848)もやはりネリーであり、結末に向かって物語を創作したということになる。

また、『嵐が丘』はイギリス文学史においてゴシック・ロマンスの系譜であり、それが後のミステリー小説の歴史と発展へとつながっていくことにも着目し、この多重の語り手構造がもたらした効果と成果についても考察したい。

2. 『夜ごとのサーカス』と『ジェイン・エア』

小田 夕香理(富山大学准教授)

本発表では、アンジェラ・カーター(*Angela Carter*, 1940-92)の『夜ごとのサーカス』(*Nights at the Circus*, 1984)とシャーロット・ブロンテ(*Charlotte Brontë*, 1816-55)の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)を取り上げる。カーターが『ジェイン・エア』に関心をもっていたことはよく知られているが、『夜ごとのサーカス』にも、カーターの『ジェイン・エア』への関心は反映されているようである。19世紀末に時代設定された『夜ごとのサーカス』において、鳥のように翼をもつヒロインのフェヴァーズは、女性が男性に支配される構図を次々に覆していくが、孤児であったフェヴァーズの人生には、同じく孤児として登場する『ジェイン・エア』のジェインを思わせる側面があり、また、ジェインの経験を裏返しにしたような側面も見いだされる。主としてフェヴァーズの人生とジェインの人生の比較を行い、『夜ごとのサーカス』と『ジェイン・エア』の関係性を探ってみたい。